

中野重治全集

第十六卷

中野重治全集

第十六卷

筑摩書房

中野重治全集第十六卷

一九七七年七月二十日初版第一刷発行

著者 中野重治

発行者 井上達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号 一〇一—一九一

電話 〇三〇七六五一(代表)

振替 東京六—四一—二二三

印刷 株式会社鈴木精興社

製本 株式会社鈴木製本所

装釘 栃折久美子

第十六卷 目次

啄木

一

鷗外その側面

二三

明治の人びと

三九

後記

著者うしろ書

いまさらながら——明治、大正のこと

五三

解題

五三

啄木

啄木に関する断片

啄木について

文連版『啄木詩集』のために

啄木と「近代」

啄木研究のひろがりについて

啄木の日をむかえて

石川啄木の生涯と仕事

啄木とローゼンバークズ

京都から

啄木の日に

この選集の役目

あらためて啄木を

啄木のふれたアジア・アフリカと今日のアジア・アフリカ

日本問題としての啄木

三

三

元

四

三

四

五

七

六

三

六

六

六

四

石川啄木について

啄木雑感

鷗外その側面

前書き

俗見の通用

鷗外論目論見のうち

鷗外と遺言状

「半日」のこと

「独逸日記」について

しげ女の文体

鷗外位置づけのために

「傍觀機関」と「大塩平八郎」

この選集のために

鷗外と自然主義との関係の一面

小説十二篇について

漱石と鷗外とのちがい

漱石と鷗外との位置と役割

鷗外の詩歌

翻訳の一面

「青年」のこと

後書き

短篇十

「雁」

「青年」

作の読まれ方ということ

「舞姫」「うたかたの記」他二篇

「即興詩人」について

森鷗外

この版のうしろ書

第五十一回鷗外忌席上

『和魂洋才の系譜』のこと

二九二

二九

三〇七

三〇九

三二

三三

三六

三四一

三四三

三四六

三四九

三五四

三五七

三六九

三七二

三七四

明治の人びと

一種の風情

三九五

恐しいような、限りなくなつかしいような人

三九八

二葉亭四迷をおもう

三九九

二つの問題

四〇五

雄弁調と美文調とに反対のもの

四〇九

初期の藤村

四一五

一種の思い出

四一九

訴える一葉文学

四三二

露伴の死と参議院

四三三

露伴のこと

四三四

中学生時代

四三一

三人の文章家

四三四

秋水の『兆民先生』

四三六

『幸徳秋水の日記と書簡』を読む

『嶺雲全集』を迎える

大塚甲山の墓

革命家の回想と面目

片山潜の原稿

心からよろこぶ

大庭柯公のこと

子規の健康

虚子、左千夫、節について

日本を表現するもの

今年の問題

「土」について

五十三年まえ

四四〇

四四九

四五〇

四六三

四六四

四六七

四七三

四七九

四八一

四九五

四九六

四九八

五〇八

啄木

啄木に関する断片

もとこれは一断片である。

明治の詩人ちゆう私の胸に特にしばしば往来する一系列の詩人がある。北村透谷、長谷川二葉亭、国木田独歩、石川啄木。透谷は「人生に相渉^{あひまた}とは何の謂^いぞ」において山路愛山の俗人的見解を駁撃することによつて人生に相渉つた。二葉亭は文学者の名を厭^{いと}うてついに「文学は男子一生の事業と為^なすに足らず」と宣した。独歩は山林のなかに存する自由にあぐがれ、北海道における開墾事業を具体的に夢みた。そして啄木は時代の開塞を認知してついに「明日^{あす}の考察」に到達した。彼らを他の明治詩人から區別するところの彼らに共通の特徴は、彼らが単に完成する藝術を創ることそのこと（いうまでもなくかようなものは事実ない。）を目ざさずして、ただちに人生の全般的考察を目ざした点に、そのために彼らが物質的にも精神的にも幾多の苦悶を経て薄幸におわつた点に、しかもそれらすべてにかかわらず、彼らが未完成のままに残した多くの仕事、矛盾と焦躁と動乱とのなかに住むわれわれの胸に幾多の考うべきものを与えずにはおかぬ点にある。

では何ゆゑに啄木を選んだか。彼がわれわれの時代に最も近く生きたがゆゑに、われわれがそれについて考えずにはいられない人生ないしは社会組織に関して積極的の見解を残したがゆゑに、そして彼が多くの追隨者を有し、それら追隨者間に社会思想家としての彼の属する種類に関して見解の相違があり、ために彼の真の姿が見失われたかに思われるがゆゑに。かくて私の目論むところは、彼の真の姿を見直すことによつて、この革命的詩人をその誤れる追隨者どもから正當に取りもどすことにある。

そしてそのために私は主として彼の思想について、その思想の変遷について考えたい。何となれば、その思想とその思想の変遷とを検討することなしには彼の詩歌が検討され得ないからである。もしも彼が明治三十年代に死んでいたならば、彼は一個の浪漫的感傷詩人として死に、彼の名は今われわれを遠く去り、当時の浪漫的感傷詩人とともにただ年代史の上にのみ並べられたであらう。かくて私の彼にたいする考察は三つの手続を経なければならぬ。一は浪漫的感傷詩人としての彼であり、二は藝術と人生ないしは社会組織との関係を究明しようとする批評家としての彼であり、三は自分を社会主義者として宜した晩年の彼である。

小学校の首席の卒業。十四歳の新詩社加盟。十五歳の足尾銅山鉅毒被害者のための釀金運動きざんどう。これらは幼くして彼の神経の俊敏であり純正であつたことを示す。この俊敏と純正とをもつて彼は詩歌の道にはいつてきた。當時わが国の詩は『明星』の極盛期であり、その影響を受けた彼が一人の若い浪漫的感傷詩人として出発したことは前述のごとくである。注意すべきことは、だが、「君死に給ふことなかれ」の一篇において、封建的軍国主義にたいする勃興し来たつた市民の果敢な浪漫的反抗を歌いあげた与謝野晶子氏のごときが、『明星』の運動の固定化につれて退嬰たいえいし、保守し、有産者化したに反して、新詩社社中俊英の一人であつた啄木が、いくぶんの反抗を示して行つたこと、それら有頂天の夢想家どもから漸次に分離して行つた点にある。明治四十一年一月三十日彼は金田きんだい一氏にあてて書いた、「今日以後の日本は、明星がモハヤ時勢に先んずる事が出来なくなつたと思ふが如何、自然主義反対なんか駄目駄目、」ここで彼がこれを書いた（ここで彼は第二の段階にはいつている。）四十年を考えてみよう。おくれて入り来たつた日本の資本主義はより大きな歩幅をもつて歩いてきた。「実業へ！」の叫びのなかに日清役から日露役に至る十年間、日本の資本主義は確固たる地歩を占めてきた。このことは他方必然に社会主義運動を触発し、しかもすでに帝国主義化した日本の早熟的資本主義はようやく戦後の反動期にはいり、財界極度の恐慌は有産者団をして無産者団の頭上にその封建的武器を振るわしめ、弾圧に次ぐ弾圧のために労働運動のごときは死に瀕し、ために労働階級の反抗意識のあるものは、四十年二月における足尾銅山の例の

ごとく放火と破壊とに爆裂するのやむなきに至つたのである。かかる情勢ちゆうにあつて、日本の文学は資本主義の基礎の上に自然主義を花咲かすための必死の努力を戦つていた。当時自然主義は藝術の分野における最前線であつた。そしてその合言葉は、人生のあらゆる諸相を、過去が蓄積し来たりまた蓄積しつつある無上の醜さにもかかわらず、のこる限なく剔抉するところにあつた。だが常規的に進展しなかつた日本の資本主義そのものは、必然に日本の自然主義をも常規的には進展させなかつた。フランスの自然主義がゾラをそのルーゴン・マカール叢書ちゆうにおいて社会の考察に導いたのに反し、日本の自然主義は自然主義作家をたゞいわゆる現実暴露の悲哀に導いたに過ぎなかつた。自然主義の作家は自然主義の方法をあらゆる事象に用うべきであつた。だが実際には？　ここに田山花袋氏の言葉がある。

「明治四十年から四十二年にわたる間の自然主義運動の猛烈であつたことは、今更ここにそれをくり返すまでもない。自然主義といふ言葉は何処でも彼処でも言はれた。変な意味にさへ用ゐられた。否、そればかりではなかつた、その尖つた方面は、飽までも実行とつづいてゐたために——今までのやうに單なる小説の運動ではなしに、社会運動と相連接した形が歴然としてその上にあらはれてゐたがために、後には政府の注意をも惹くやうになつて、不健全な、不道德な、危険な思想であるやうに考へられて行つた。」

しかも氏はついにいうのだ。

「私も深く頭をそつちの方へと持つて行つて見た。しかし、それは疑問でないこともなかつた。何と言つても、自然主義は藝術上の問題であつた。それは實際の方にも触れて行つてゐるにはゐたけれども、何処かそこに一皮かぶつたところがあつた。」

かくて日本においては自然主義さえもが藝術の殿堂裡に逃げこんだ。そして数多の末期的現象を伴いつつ墮落して行つた。ここに俊敏純正の啄木が、かかる自然主義の検討を始めたことは最も意味深い。それを私は啄木自身に語らしめよう。

四十一年十一月彼は書いた。

「長谷川天溪氏は、嘗て其の自然主義の立場から『国家』といふ問題を取扱つた時に、一見無造作に見える苦しい誤魔化しを試みた。(と私は信ずる。)謂ふが如く、自然主義者は何の理想も解決も要求せず、在るが儘を在るが儘に見るが故に、秋毫も国家の存在と牴觸する事がないのならば、其所謂旧道德の虚偽に對して戦つた勇敢な戦も、遂に同じ理由から名の無い戦になりはしないか。従来及び現在の世界を観察するに當つて、道德の性質及び発達を国家といふ組織から分離して考へる事は、極めて明白な誤謬である。」

また四十二年十二月彼は書いている。

「自然主義は文学を解放した。」

「一度解放された文学の主潮は、然し乍ら色々の理由から、まだ行くべき処まで行かずに、途中で停滯し、弛緩しようとする傾向を作つた。」

しかるに、彼の知己であり彼の年譜の編者である金田一氏は、当時の啄木を評して、「思想が極めて穩健になり、すべて具象的な見方になつて来て、その倫理観は、自ら自己實現説に近づき国家主義に傾いて来た」と言い、それを証するために、当時啄木が大島氏にあてた次ぎの手紙を提出するのである。

「遠い理想のみを持つて自ら現在の生活を直視することの出来ぬ人は哀れな人です、然し現実と相面接して、其処に一切の人間の可能性を忘却する人も亦憐な人でなければなりません、(中略)人生——狭く言つて現実といふものは、決して固定したものではない、随つて人間の理想といふものも固定したものではない、我々は時々刻々自分の生活(内外の)を豊富にし拡張し、然して常にそれを統一し、徹底し、改善してゆくべきではないでせうか、(中略)現在の日本には不満足だらけです、然し私も日本人です、そして私自身も現在不満足だらけです、乃ち私は、自分及び自分の生活といふものを改善すると同時に、日本人及び日本人の生活を改善する事に努力すべきではありませんまいか、(中略)自己の生活の改善、統一、徹底といふことは、やがて自己を造るといふ〔こと〕」

ではありますまいか、」

思うに金田一氏はこの手紙の後半のみを、しかもきわめて表面的に見た。啄木はここに、「自己を造る」という言葉をいくぶん観念的に用いている。だが問題は、彼がかかる言葉を用いるに至つた根拠にある。現実には動くということ、したがつて理想は進展するということ、そして最後に「現実と相面接して、其処に一切の人間の可能性」を確認するということ、これがどうして国家主義であり得、穩健な思想であり得るのか。（もちろん私は穩健、国家主義等の「言葉」についていうのではない。）現実のなかにいつさいの人間の可能性を発見することが何をもたらすかを見得るものは、金田一氏の見解が誤りであり、当時の啄木の立脚点が金田一氏の指示するところに対蹠するものであることを知るだらう。然り而して、かの有名な、けれどもその内容についてはわれわれの永久に知り得ない（だがやがて知り得るであらう！）前代未聞なりと称する大逆事件はこの四十三年の夏に勃発したものである。そしてここにまた啄木の手紙がある。

「さうして僕は必ず現在の社会組織經濟組織を破壊しなければならぬと信じてゐる、これ僕の空論ではなくて、過去数年間の実生活から得た結論である、僕は他日僕の所信の上に立つて多少の活動をしたいと思ふ、僕は長い間自分を社会主義者と呼ぶことを躊躇してゐたが、今ではもう躊躇しない、無論社会主義は最後の理想ではない、人類の社会的理想の結局は無政府主義の外にない（君、日本人はこの主義の何たるかを知らずに唯その名を恐れてゐる、僕はクロポトキンの著書を読んでビツクリしたが、これほど大きい、深い、そして確実にして且つ必要な哲学は外にない、無政府主義は決して暴力主義でない、今度の^{*}大逆事件は政府の圧迫の結果だ、（略）然し無政府主義はどこまでも最後の理想だ。實際家は先づ社会主義者、若しくは国家社会主義者でなくてはならぬ、僕は僕の全身の熱心を今この問題に傾けてゐる、『安樂^{ウエルビーイング}を要求するは人間の權利である』僕は今の一切の旧思想、旧制度に不満足だ、」（四十四年一月九日）「その後私は思想上でも実行上でも色々とその『生活改善』といふことに努力しました、併しやがて私は、その革命が実は革命の第一歩に過ぎなかつたことを知らねばなりません

でした、現在の社会組織、経済組織、家族制度……それらをその儘にしておいて自分だけ一人合理的生活を建設しようといふことは、実験の結果、遂ひに失敗に終らざるを得ませんでした、その時から私は、一人で知らず知らずの間に Social Revolutionist となり、色々の事に対してひそかに socialistic な考へ方をするやうになつてゐました。恰度そこへ伝へられたのが今度の大事件の発覚でした、」(日付なし。おそらく四十四年二、三月ごろ大学病院青山内科施療室内で書かれたもの。)

「雑誌の目的は、単に文学雑誌たるのみでなく、保証金を納めざる雑誌としての可能の範圍に於て、現代の社会組織、経済組織、政治組織乃至いろいろの制度に対する根本批評を青年が進んでやるやうな機運を作りたいといふにあります、(中略)我々は嘗て我々の好きなロシアの青年のなした如くに、我々の目を広く社会の上に移し、出来うべくんば、我々の手と足とをも他日その方に延ばしたいと思ふのであります。我々は文学本位の文学から一足踏み出して『人民の中に行』きたいのであります、」(四十四年二月十四日)

これらの手紙をわれわれが読むとき、使用された種々の言葉の定義上の混雜にかかわらず、われわれはただ彼のいおうと欲したところを了解すべきである。彼はここで彼が社会主義者であることを宣した。人類の社会的理想は無政府主義であり(彼によれば)、けれども「實際家」(この言葉に彼は傍点している。)は先ず社会主義者もしくは国家社会主義者であらねばならぬとする。そしてわれわれは、彼のいう實際家、彼のいう社会主義者とは何の謂いであるかを多くの努力なしに髣髴し得、かくて彼が人民のなかへ行こうとしているのを見得るのである。金田一氏によれば、彼は「ある出来事の刺戟を受けて考へ方に峻しい変化を生じた。又零細の小遣ひで古本屋を漁り、これまで出た限りの社会主義的な本を得ては耽讀してゐた、所詮行く所まで行かなければ引返すことの出来ない熱心さを以て厳しく突込みながら。」なのである。

明治の十九年に生まれ、日清、日露の兩役を経てきた彼は、日本の資本主義と相並んで歩いてきた。そして日本の資本主義が第一回の恐慌を出来せしめた四十年代にはいつて、その最も猛烈な反動期にはいつて、彼は敢然